

# SKIPシティ国際Dシネマ映画祭2014

7.19(SAT)-27(SUN) SKIP CITY INTERNATIONAL D-Cinema FESTIVAL 2014

長編コンペティション部門『PLASTIC CRIME』

加藤 悦生監督 インタビュー

—自主制作で挑んだとのこと。まず、映画制作を思い立ったきっかけを教えてください。

今からさかのぼることもう 20 年ぐらいになりますけど、映画が好きで千代田芸術専門学校映画芸術科に進みました。学校には溝口(健二監督)の演出はどうだとか、マキノ(雅広)はすごいとか言うような映画狂が集まってきていて。ただ、彼らは知識を語るだけで、自身の表現を追究するようなことはほとんどない。そこに反発を覚えたのと生活を成り立たせなくては行けない現実もあったので、まずテレビの世界に入りました。



©2013 PLASTIC CRIME

以来、ずっとフリーのディレクターとしてやってきたのですが、40 歳を前にして映画への想いが再び甦ったというか。僕は、仕事は選ばれてはじめてやることができているんです。映画監督も目指してできることではなくて、選ばれた人がやることができている。でも、作らないと何もはじまらないから、まずは1本映画を作って、それでダメならいいやと(苦笑)。

—それにしてもよく踏み切れましたね？

実は 30 歳のときにも、一度映画を作ろうと思ったんです。ただ、それなりに映像業界でキャリアを積んできて、そのときの条件や状況から、ある程度、作品の仕上がりが見えてしまっていて踏み切れなかった。そんな二の足を踏んでいるうちにあつという間に 40 代に入ってしまったので、ここでやらないと、もう次にそんな気持ちになるのは死ぬ直前だなと(笑)。あと、RHYMESTER の「ONCE AGAIN」にも後押しされました。“気がつけば人生も後半のページ、なのに未だ半端なステージ”という歌詞があるのですが、40 歳になったとき、この曲を聴いて“まさに俺だな”と。この曲に勇気づけられて作ったといってもいいかもしれません。

—そこでまず何から取り掛かったのでしょうか。やはり脚本作りからでしょうか？

そうですね。脚本ができればなんとかなるというか。脚本が出来ると“こいつ本気だな”と周囲も思ってくれるし(笑)。で、うれしいことに脚本を読んでもらった役者さんたちの反応がすごくよかったです。たとえば窃盗団を仕切るハナコ役の小林真実さんは、彼女の舞台を見にいったときに台本を渡したんですけど、すぐに連絡がきて即決で出演を承諾してくれました。それだけではなく次に会った時、セリフが全部頭に入っていたんです。確定した脚本でもないのに。これはものすごく自信になりました。こうして役者さんがフィクスできると、自然とスタッフも集まってきてくれて。ここまできるともう逃げられなくて(笑)、あとはクランクインするだけになっていました。

—引きこもりの青年が偶然居合わせた窃盗団の一味に加わり、自身の進むべき道を見つけていくというストーリー。このアイデアはどこから出てきたのでしょうか？

はっきり言うと消去法です。自己資金で予算は限られていますし、当然、出来ることも限られる。空港での銃撃戦とか時代劇とかとてもじゃないけどできない。そこはできることで最大限できることをやるしかない。幸いプロのテレビディレクターとしてやってきた僕には、現場で撮れるもので最大限できることをするのが習慣づいている。そこで撮影可能な場所や予算内で可能なシチュエーションなどから最大限できることを考えてぬいてできたのがこのドラマでした。また、僕は単純にひとりの映画ファン。だから、自分の映画を作る場合であっても、芸術性とか監督の個性とかどうでもよくて。観客の方が楽しんでもらえる作品にとにかくしたい。だから、多くが自分の身に寄せられる普遍的な作品にしたいとの思いから、親子の関係であったり、単なる泥棒ではなく、連帯感の出る窃盗団というチームにしたりという工夫はしました。あと、映画は時代を映しますから、現代性を大切にしたのは確かですね。

—泥棒コンビと引きこもりの青年がつながるといのがユニークでした。

テレビドラマ「スクールウォーズ」などのパターンにひとつはめた形です。おちこぼれたちの中に、まじめなイソップが混じることで化学反応が起こるみたいな。

—通常ではまず引きこもりの青年と犯罪集団はつながらないですよ。



©2013 PLASTIC CRIME

その通りで、普通はこの双方が鉢合わせする可能性はありますが、交わることはない。理詰めで考えるとありえない。でも、それを可能にしてしまうのが映画だと思うんです。嘘をほんとうに見せることができるというか。ですから、そこは映画のマジックを信じたかった。両者が出逢い、3人でカレーを食べるシーン。ここにかけました。だから、あのショットはもうカットを割らないで長回しでいって。泥棒コンビと夢人という引きこもり青年が線になってつながる瞬間を画に封じ込めたかった。それはスタッフと役者も感じていたみたいで。現場では2テイク目で成功したんですけど、その瞬間、みんなちよつとうるつときて、涙目になりました。

—ほかにもそういった映画のマジックを感じた瞬間はありましたか？

—ほかにもそういった映画のマジックを感じた瞬間はありましたか？

夢人が車のガラスを割るシーンですね。あのシーン、石を窓ガラスなげつけて一発で割れるというのが当初の予定。でも、当てると割れる位置に石がうまく当たらずにはねかえってきてしまい、あわてて拾って2回目でようやく割れた。でも、そのパニングが逆にシーンにリアリティを与えている。ここに関しては予定調和にならなかったことがシーンに力を与えた。こういうことが映画には起きるんだと思いましたね。

—作品全体の印象として、ひとつの犯罪劇にも受け取れますし、若者の成長物語でもある。コメディ的なところもあっていろいろな見方ができる作品だと思いました。

僕としてはストレートな青春ドラマを作ったつもりです。でも、そういう多様な面があると受けとめてもらえるのはうれしいです。

## —映画を作る上で影響を受けている人物はいますか？

1番好きな監督はポール・トーマス・アンダーソン。『マグノリア』を見たときの衝撃は今も忘れません。こんな天才がいるんだと、オレがわざわざ映画を撮る必要はないとさえ思ったぐらいです。だからすごく影響されています。あと、サム・メンデス監督。『PLASTIC CRIME』は構成が実は『アメリカン・ビューティー』っぽい。真似るつもりはまったくなかったんですけど、自然とそうになっていたんですね。自分でも気づかぬうちに。

## —今回、映画祭で上映されるわけですが、どんな心境でしょう？

応募しておいて言うのもなんですが、この作品はいわゆるアート性や社会性に重きが置かれる傾向の強い国際映画祭のコンペ部門にかかるようなタイプではない。だから、正直なことを言うと、スキップシティの関係者の方たち“こんな映画を選んじゃって正気？”と思っています(笑)。今の心境としては、こういう場で上映されることが決まって、少し肩の荷が下りました。朝から朝まで撮影して、終わると僕の自宅で雑魚寝。そして、また次の日という不眠不休状態の過酷な撮影で完成させた作品ですから、多くの人にお披露目できる場ができたことでスタッフやキャストのみんなにようやく顔向けできるかなと思っています。大スクリーンに耐えうる映像が撮れる良いカメラを使いましたし、音声にも力を入れました。いまはひとりでも多くの人に見てもらえたと思っています。

## —今後、考えていることはありますか？

今回の作品で道が開けるとかまったく思っていません(苦笑)。自分に映画監督の才能があるとうぬぼられるほど若くないですから。まあ、今の仕事を続けつつ、またチャンスがあったらとは思っています。映画のアイデアだけは無限にあるので。

(取材・文 水上賢治)



### 監督:加藤 悦生

1971年生まれ、東京都出身。フリーランスの映像ディレクターである。十代の終わりに観た森田芳光監督の『家族ゲーム』に影響を受け、映画の道を志し、千代田芸術専門学校映画芸術科に入学。卒業後はテレビ、CM、VPの映像演出に従事するが、映画作りの思いを諦めきれず、2013年に自主制作で長編映画『PLASTIC CRIME』を完成させる。

## 長編コンペティション部門『PLASTIC CRIME』 <2013年/日本/108分>

■上映 7.21(月・祝) 17:00 SKIPシティ映像ホール  
7.25(金) 11:00 SKIPシティ多目的ホール

### <STORY>

#### 引きこもりが窃盗団の一味に!? 意外な展開に目が離せないクライムストーリー。

両親との会話もなく、無為な日々を過ごしていた引きこもりの夢人はある日、空き巣狙いの窃盗団と鉢合わせし、それがきっかけで窃盗団に加わる。ようやく夢人にも自分の進むべき道が見え始めた、そのとき…。

監督：加藤悦生

出演：伊藤和哉、鄭美奈、辻しのぶ、小林真実、片岡功、小池真吾、鈴木タロオ